

Jane Eyre's Rival: The Real Mrs Rochester 試論

— Bertha Mason のもうひとつの物語 —

菟原 美和

Abstract: In *Wide Sargasso Sea*, which is a type of prequel to Charlotte Brontë's *Jane Eyre*, Jean Rhys gave Bertha Mason a chance to talk about herself, what happened to her before coming to England, especially why her mother went mad. On the other hand, in Clair Holland's *Jane Eyre's Rival: The Real Mrs Rochester*, Lisa, who is a psychologist and Bertha's descendant, tells us not only what happened to Bertha before leaving the West Indies but also what really happened to her in England, which nobody in Thornfield knew except Bertha and her lover John. In *Jane Eyre*, Bertha was unhappy after getting married, while in *Jane Eyre's Rival* the author gives Bertha a chance to meet and get married to her ideal man after her unsuccessful marriage to Edward Rochester. *Jane Eyre's Rival* has an intriguing structure. In the even numbered chapters, we read about the love story of Bertha Mason, and in the odd numbered chapters we find Lisa's psychological explorations of love and relationships. These two stories about Bertha and Lisa are linked; each chapter is closely connected with the surrounding chapters. The general impression of the book suggests psychology more than literature, but its unfolding of the interesting hidden story of Bertha Mason provides good entertainment.

(1) はじめに

これまでに Charlotte Brontë (1819-1855) の小説 *Jane Eyre* (1847) の改作や続編が他の作家たちによって数多く書かれてきた。Jane Austen (1775-1817) の小説をはじめとする、イギリスの有名な文学作品を下敷きにした物語を数多く書いている Emma Tennant (1937-) が書いた『ジェイン・エア』の改作は、Edward Rochester の養女 *Adèle* を主人公にした物語になっている。そこではバーサが起こした火事で Thornfield Hall が焼け落ちたと原作にはある部分が、実はそれは Fairfax 夫人に薬を飲まされて誘導されたアデールが太陽光線と拡大鏡を使って起こした火事であったことが明かされる。¹ 短編小説集 *The*

Bloody Chamber and Other Stories (1979)をはじめとする多くの作品を遺したイギリスの女性作家 Angela Carter (1940-92) が亡くなる前に最後に取り組んでいた作品も『ジェイン・エア』の続編であったと言われている。² オンデマンド出版やオンライン出版の普及により、出版がしやすくなったことも手伝って、さらにこの5年ほどの間に続々と『ジェイン・エア』の「語り直し」の物語が出版されている。エマ・テナントの作品と同じくアデールに焦点をあてた Claire Moise の *Alele[sic]* [,] *Grace and Celine: The Other Women in Jane Eyre* では、アデールはその後ブルー・ストッキングの集まる女学校で学び、看護師として Florence Nightingale (1820-1910) とともにクリミア戦争に行ったという物語が創作されている。Teana Rowland は『ジェイン・エア』の主人公 Jane Eyre の物語を語り直し、Tara Bradley と J.L. Niemann はロチェスターに焦点をあてて『ジェイン・エア』を書き直した。Hilary Bailey と Kimberly A. Bennett は『ジェイン・エア』の続編を書いて、ロチェスターと結婚後のジェインの物語を創作した。Elizabeth Newark は、ジェインとロチェスターの間にできた娘の物語を書いた。³

『ジェイン・エア』の改作では、舞台を19世紀から現代に置き換えるなどの大幅な変更を加えたものだけでなく、原作に描かれている物語を別の視点から語り直す、原作では描かれていない部分を描く、原作では知り得ない真実があるのだとしてその物語を語るというようなスタイルのものも多い。そのような物語の先駆者で、なおかつ最もよく知られたものは Bertha Mason⁴ の視点から描かれた Jean Rhys (1890-1979) の *Wide Sargasso Sea* (1966) である。この小説は出版の翌年に W.H. スミス文学賞を受賞し、それによってジェーン・リースはポスト・コロニアル文学の代表的な作家のひとりとして世に名を残すことになった。

『ジェイン・エア』は、シャーロット・ブロンテが得意とする一人称の語りで語られる小説で、作者の自伝的要素を含んだ物語である。主人公のジェインが自ら語るその物語では、ジェインが10歳の時からロチェスターと結婚した20歳頃までの話が、結婚の10年後に語られていることになっている。結婚後の10年間に起こった出来事についてはほんの少ししか触れられていないし、自伝を語っている時点でまだ30歳ほどの年齢にすぎないのだから、『ジェイン・エア』はその後の物語を想像し、続編を書いてみたくなる要素を大いに持っている。

本来『ジェイン・エア』には“An Autobiography”という副題がつき、有名な「読者よ、わたしは彼と結婚した」という一節⁵をはじめとして、「読者よ」と小説の語り手が読み手に語りかける箇所が何度もあり、まるでノンフィクションであるかのようにジェインの半生が語られる。実際のところノンフィクションの自伝であっても、そこでその人のこれまでの生涯の出来事の全てが語られるわけではなく、「〇〇の自伝」というひとつの

「物語」を完成させるのに都合の良い部分だけが繋ぎ合わされてひとつの物語が語られるのであり、それは一見ノンフィクションであるが、自分に都合のよい視点から描かれて客観性を欠き、ノンフィクションというよりもむしろフィクションとなり得る。

『ジェイン・エア』の登場人物の中でも、特に西インド諸島の植民地出身のバーサ・メイソンやフランス人の母親をもつアデル・ヴァランスは、著者シャーロット・ブロンテの分身的な主人公ジェイン・エアが持つ19世紀的なナショナリズムの視点から、人種的・民族的偏見を含んでいるように思われる描き方がされていることもあいまって、語り直し、語り足しの対象になりやすかった。その中でも『サルガッソーの広い海』は、「文学作品」として高く評価され、これまで多くの研究者によってその作品について論じられてきた。一方、それ以外の「語り直し」の物語については、一般的に「娯楽小説」として『ジェイン・エア』の読者たちを楽しませてきた。本稿では『ジェイン・エア』の「語り直し」の物語の中でも最も新しいもののひとつで、kindle版では2011年7月、ペーパーバック版では2011年8月に出版されたばかりの作品であるClair Hollandの*Jane Eyre's Rival: The Real Mrs Rochester* (2011)について考察をするが、同じように『ジェイン・エア』のバーサ・メイソンに焦点をあてて『ジェイン・エア』を書き直した物語で、『ジェイン・エア』の「語り直し」の先駆者であるジーン・リースの『サルガッソーの広い海』と適宜比較対照するという形で、クレア・ホルランドの物語の作品世界を概観し、最新の「語り直し」の試みがどのようになされたのかを検証してみたいと思う。

(2) 「クレオール」であることが意味するもの

『ジェイン・エアのライバル—真実のロチェスター夫人—』の語り手であるLisaは、幼い頃に祖母から一族の秘密を聞かされたが、それはリサの曾曾曾祖母が『ジェイン・エア』に登場するバーサ・メイソンであるということであった。リサは第一章の最後を、「これはロチェスター氏の最初の夫人の物語である。真実の物語である。シャーロット・ブロンテによってジェイン・エアに都合のいいように作られたものではなく、本当に起こったことについての物語なのだ」⁶という言葉で締めくくって、以降の偶数章でバーサの物語を語り始める前置きをするのだが、『サルガッソーの広い海』を読んだことのある読者ならば、『ジェイン・エアのライバル』の第一章を読んだ時点で、ジーン・リースの書いた「バーサの真実の物語」である『サルガッソーの広い海』のことを連想するであろう。しかし実際には両者は様々な点でかなり異なっている。

まず、両者の間にはバーサ・メイソンの人種的・民族的アンデンティティーの設定に違いがある。『ジェイン・エア』では、バーサはジャマイカの農園主兼商人の娘で、その母

親は「クレオール」だったというだけで、バーサの血統についてそれ以上の説明はない。「クレオール」という言葉は「西インド諸島や南アメリカに最初に移住したヨーロッパ人の子孫」を意味して用いられるとともに、「西インド諸島のヨーロッパ人と黒人の血の混じった人」を指しても使われることのある言葉であるが、『サルガッソーの広い海』では、バーサは人種的には前者、一方、『ジェイン・エアのライバル』では後者の意味でクレオールである。

ジーン・リースの物語では、バーサは基本的には白人なのであるが、初期にヨーロッパからやってきて西インド諸島の植民地に定住した人々の子孫である。そういった人々は血統的には白人であっても本当の白人とみなされず、社会の中での扱いは「白人」でも「黒人」でもないという複雑なものであった。ジーン・リース自身が初期に西インド諸島にやってきた白人の子孫であり、17歳の時にイギリスにやってくるまで、バーサと同じように西インド諸島のイギリスの植民地で生まれ育ち、やはり「白人」でもなく「黒人」でもないと見なされた「クレオール」の女性のひとりであった。リースが自ら味わった「クレオール」という複雑な人種的・民族的アイデンティティゆえの苦しみは大きく、同じようなアイデンティティを持った『ジェイン・エア』のバーサ・メイソンの姿に自分を重ね合わせ、そこから出来上がった小説が『サルガッソーの広い海』である。

『サルガッソーの広い海』は、一部ロチェスターによる語りの部分もあるが、ほとんどはバーサによって語られる物語である。『ジェイン・エア』は、上述のようにジェインによる一人称の語りで語られる物語であり、バーサに関する記述はかなり断片的であるし、ジェインの語る物語の中でバーサは一度も言葉を発することはない。『ジェイン・エア』では声を与えられていなかったこのバーサに声を与えたのが、『サルガッソーの広い海』であり、植民地主義的な視点でイギリスの中産階級の女性によって語られていた物語が、植民地出身の女性の視点からの物語に変えられ、いわゆる「ポスト・コロニアリズム」の文学作品として、そこでは抑圧された旧植民地出身者の苦悩が描き出されているのである。

『ジェイン・エア』では、バーサは三代にわたる狂人の家系で、ロチェスターの結婚後にその遺伝的特質が表れたということになっている。しかし、『サルガッソーの広い海』ではバーサは遺伝的に狂気を発症した狂女というわけではなく、たしかに母親は精神に異常をきたしていたが、それはそうなるように周囲から彼女が追いつめられた結果として起こったことであり、バーサも不当に狂人扱いされて部屋に閉じ込められていたのだとして、狂女の汚名を着せられたバーサの名誉を回復させている。“white nigger” や “white cockroach”⁷ と揶揄された複雑な人種的・民族的アイデンティティをもったバーサの一家は、バーサの父 Cosway 氏が奴隷所有者で、バーサの母も奴隷所有者の娘であったために、特に黒人たちから憎まれていた。バーサの父が亡くなり、さらに大英帝国内のほと

んどの地域の奴隷を自由にする奴隷制廃止令が施行されると、バーサの母のために働いてくれるものはほとんどいなくなり、Mason 氏と再婚するまでバーサの母は友達もお金もない孤独な生活を送った。その後メイソン氏の再婚相手として後妻に入るが、このメイソン氏が奴隷制の廃止以降に西インド諸島にやってきた「本物の白人」であり、裕福なイギリス人であったことや、バーサの母親がメイソン氏よりずいぶん若かったことなどで、周囲の人々の反感を買う。やがてバーサの一家を嫌っていた者の仕業と思われるが、バーサたちの住んでいた家に火が放たれ、病気だった弟が火傷を負って死亡すると、バーサの母は動揺して精神的に不安定になり、そんな彼女をみんなが狂人扱いするようになる。バーサは修道院に行くことになり、メイソン氏が妻のために家を買ひ、バーサの母は雇われた黒人の夫婦とそこで孤独に暮らした。もともとジャマイカが嫌いなメイソン氏はたびたびジャマイカを離れ、妻のことなどほとんど忘れてしまう。バーサの母は酒を飲み、裸足で暮らすようになる。ふしだらな女という噂は、バーサの母が精神に異常をきたし、何も気にしなくなったのをいいことに彼女の世話をしていた男が好きな時に彼女を抱いていたのが人に広まったものであった。

ロチェスターの父と兄の計略によって、バーサの兄 Richard とロチェスターが取引をし、バーサに多額の結婚持参金を持参させるかわりに、ロチェスターがバーサの面倒を見ることになる。しかしバーサと結婚した後で、バーサの母は奴隷所有者の娘であり、またバーサの母の最初の夫も奴隷所有者だったという隠された事実を知るとともに、バーサの家系は狂人の家系だという勝手な噂を聞いて、ロチェスターはすっかりバーサに対して愛情が持てなくなる。父と兄が相次いで亡くなり、兄が継ぐはずだった父の財産が思いがけず自分のものになると、ロチェスターはバーサを連れてイギリスに戻るのであるが、彼女の存在を周囲に隠し、バーサを三階の部屋に監禁したのであった。

『ジェイン・エア』では、そこで語られる物語がいつ頃に起こった物語なのかということは明確には示されていないが、一般的には 1798 年から 1808 年頃に起こった物語をジェインが 1818 年～1819 年頃に語っていると考えられている。⁸ それに対して『サルガッソーの広い海』では、バーサの生きていた時代は 1830 年代前後に設定されている。この小説ではバーサ・メイソンはメイソン氏の血のつながった子どもではなく、バーサの母の最初の夫で奴隷所有者であったコズウェイ氏がバーサと血の繋がりのある父親である。メイソン氏は夫を亡くしたバーサの母親の再婚相手で、兄のリチャード・メイソンはメイソン氏の前妻の子であり、メイソン氏の後妻の連れ子がバーサであるという『ジェイン・エア』にはなかった話を取り入れているのだが、1830 年代に実施された奴隷制の廃止によってバーサの家族の生活に大きな影響があり、奴隷制の廃止以降にますますバーサとその母親が複雑な人種・民族的アイデンティティのために苦しんだという物語にするた

めに、これは不可欠な設定であった。

一方、『ジェイン・エアのライバル』では、バーサ・メイソンは「ヨーロッパ人と黒人の混血」という意味で「クレオール」の女性である。バーサの母親はジャマイカで農園を所有していたメイソン氏の奴隷のひとりであったが、メイソン氏との間に三人の娘をもうけたことで、彼の妻が亡くなると「愛人」に昇格し、彼の大きな屋敷に住むことができるようになる。ただし、遺伝的には「混血」であったが、それをごまかせる顔つきと明るい肌色をしていたこともあって、メイソン氏はバーサを自分の娘として正式に受け入れてからは「白人」として育てる。奴隷制が廃止されると、メイソン氏はバーサの母親に結婚の約束もする。

メイソン氏に奨励されて、バーサはメイソン氏のビジネスのサポートをしていたイギリス人の紳士であるロチェスター氏の次男であるエドワード・ロチェスターと結婚する。しかしふたりの良好な関係は長続きせず、バーサの元気いっぱいの性質をコントロールするのが難しく、ロチェスターは疲れはじめる。やがてバーサは妊娠するが、生まれてきた子どもは肌がココア色で鼻が平べったくて短く、髪はカールして漆黒の色をしている。その時点ではバーサが実は「混血」であることをまだ知らないでいたロチェスターは、その子は自分の子であるはずがないと思って妻の不貞を疑い、その子が死んでしまうと、むしろそれを喜ぶ。その後ロチェスターはスパニッシュ・タウンを出てしばらくジャマイカには戻らない。5年後にロチェスターがジャマイカに戻ると、メイソン氏が亡くなり、その地所を相続したりチャード・メイソンが投資に失敗して土地を売る羽目になり、バーサも文無しになっている。幸いバーサの結婚持参金を懸命に投資していたし、ロチェスターの父と兄が相次いで亡くなり、兄が相続するはずだった財産がロチェスターのものになったので、ロチェスターはバーサを連れてイギリスに帰る。

『ジェイン・エアのライバル』においても『サルガッソーの広い海』と同様に、バーサは遺伝的に狂気を受け継いだ狂女だったわけではなかったということになっている。しかし、狂人扱いされるようになったいきさつについては、両者で異なる。『ジェイン・エアのライバル』では自分を残したままジャマイカを離れていたロチェスターが数年ぶりに戻ってきたかと思うと、バーサは突然一緒にイギリスに行かされることになり、もはやロチェスターを愛してもいなかったし、彼にも愛されていなかったゆえに反抗的になり、彼女の気を鎮めようとしたロチェスターに船の中でアヘンを飲まされる。その結果、イギリスに着くころには中毒になり、こうしてアヘンを常用するようになった影響による行動によって狂人扱いされるようになったことになっている。

『ジェイン・エアのライバル』では、メイソン氏は奴隷制が廃止されると自分の愛人であったバーサの母親に結婚を約束したということになっていて、時代設定は『サルガッ

ソーの広い海』と同時期である。この奴隷制の廃止という歴史的に大きな出来事の前後に起こった物語として時代を設定することで、19世紀イギリスの父権制社会においては、妻として完全に夫であるロチェスターの所有物であり、奴隷制が廃止された後でも女性として家庭の中で引き続き夫の奴隷のような存在で、不当に監禁され続けたバーサのことを、語り手でありバーサの子孫であるリサが皮肉に思うのである。

(3) 名前が表象するアイデンティティ

『ジェイン・エア』では、ロチェスターとジェインの結婚式の最中に実はロチェスターにはすでにバーサという妻がいることが明かされる。その際に、バーサのミドル・ネームが母親のファースト・ネームに由来する“Antoinetta”であることに言及があるだけで、ロチェスターの最初の妻は基本的に常に「バーサ」と呼ばれている。それに対して『サルガッソーの広い海』では、バーサの母は通常“Annette”と呼ばれ、バーサは母親の名前に由来する名前である“Antoinette”という名で呼ばれている。西インド諸島のイギリスの植民地のうち、リースが生まれ育ったドミニカ島のようなフランスとの争奪戦の末にイギリス領となった地域では、公用語は英語であっても、現地化したフランス語を話す住民が多かったが、『サルガッソーの広い海』では、バーサの母はジーン・リースが生まれ育ったドミニカ島の南東にあるマルティニークの出身で、フランス系の血を引いているということになっている。マルティニーク島は1762-63年、1794-1802年、および1809-14年の間は一時的にイギリスに占領されたが、その前後の大半はフランス領であり、そのためリースは母の名前に由来するバーサのミドル・ネームを、「アントワネット」ではなく、フランス風に「アントワネット」と表記したのではないと思われる。

『サルガッソーの広い海』では、ロチェスターは最初はバーサを「アントワネット」と呼んでいるが、やがて「アントワネット」ではなく「バーサ」と呼ぶことを好むようになる。バーサが狂人の家系で、彼女の母も狂気を発症した後に死んだと知って、母親と同じ名前で彼女を呼びたくないと思ったのである。こうしてもはや「バーサ」としか自分を呼ばなくなったロチェスターに対してバーサは、「バーサは私の名前じゃないわ。あなたは別の名前で呼んで、私を誰か他の人にしようとしているのよ」と言って彼を非難する⁹。

一方、『ジェイン・エアのライバル』では、語り手のリサはバーサを最初は「アントワネット」という名前で呼んでいる。しかし興味を持って遠くからずっと見守っていたJohnと初めて直接出会った時、バーサは「アントワネット」とも「バーサ」とも名乗らず、自分の名前はLouellaだと言う。それ以降はずっとバーサとジョンがバーサを「ルーエラ」と呼ぶとともに、リサもバーサをそう呼ぶ。兄のリチャードがイギリスにやってき

た時も、彼がバーサを「アントワネット」と呼ぶと、バーサは「わたしはアントワネットではないし、バーサでもない。ルーエラよ」(104)と主張する。

リチャード・メイソンは、投資に失敗して失った財産をかなり取り戻し、バーサの母親の具合がよくないため、バーサを西インド諸島に連れて行こうと思ってやってきたのであるが、バーサにとってはこれは今更という気分にする行為であり、バーサは怒りすら覚え、ジャマイカに行くことを拒否する。バーサはそれまでに何度か兄や妹に宛てて手紙を書いていたが、看守の役を務めている Grace Poole は実はそれらを送ってはいなかった。また、結婚してまもなく夫から愛されなくなり、その存在を周囲に隠され、故郷から遠く離れたイギリスで三階の部屋に監禁されて、不幸な日々を送っていたが、ジョンという男性に出会い、彼と恋愛関係になった今、ジョンから引き離されるのは嫌であった。

「ルーエラ」という名はバーサが子どもの頃に、自分の名前が発音できないでいたバーサにバーサの母親が与えてくれた名前であった。バーサは「アントワネット」や「バーサ」という呼称を嫌い、子ども時代に使っていた「ルーエラ」という名前で呼ばれたいと思う。それは成長した自分が他者から不当に強いられた役割を嫌い、ありのままの自分として生きたいという願望の表れと言える。バーサはジョンの目には自分が「狂女」とか「拒絶された妻」、「失われた妹」といった自分が今までの人生で不本意に果たしてきたどんな役割の人間にも見えていないのがわかると、それをとてもうれしく感じる。ジョンはバーサを単に「女性」として見て、しかも「美しい女性」、「自分の女」として見てくれているのであった(100)。

『ジェイン・エアのライバル』の中で、語り手のリサは心理学の研究者の立場から、理想の相手に出会うのにまず一番重要なことは自分自身をよく知ることであると語る。本当の自己を認識し、自分が好きになり、自分にとって大事なものは何かを知ること、理想の相手に出会えるのであり、相手を完全に知り、相手にも本当の自分を知ってもらい、そのままの自分を愛してもらえるのが本当に親密になるということだという。『ジェイン・エアのライバル』では、本当の自分でない自分の人生を生かされているバーサのものがきの象徴として、バーサは「バーサ」や「アントワネット」という呼び名を嫌い、「ルーエラ」と自称するのである。

(4) 理想のパートナーを探し求めて

『ジェイン・エアのライバル』は、Fiona Beddoes-Jones 氏がクレア・ホランドという筆名で書いた物語である。ベドーズ・ジョーンズ氏は心理学の専門家で、イギリスで自己啓発のためのトレーニングなどのサービスを提供する会社を経営し、自身もその会社でコ

ンサルタントやトレーナーのひとりとして活躍している。そのような著者によって書かれた『ジェイン・エアのライバル』は、小説でもあり心理学の本でもある。

『ジェイン・エアのライバル』では、文字の印刷に二種類のフォントが使われている。そしてひとつの小説の中で、ふたつの物語が交互にそれぞれ別個に、しかしお互いに絡み合いながら展開していくという興味深い構造の本になっている。奇数の章は“serif”と呼ばれる「ひげ飾り」のない書体で文字が印刷されている。一方偶数の章には「セリフ」のついた書体を使うことで、それぞれの章がその直前の章の話の続きの物語ではなく、直接的に物語がつながっているのは同じ書体を使っている章同士だけであることが明示されている。奇数の章の物語は「現在の物語」であり、偶数の章は「19世紀」の物語になっている。そして、前者は語り手である Lisa の物語であり、後者は『ジェイン・エアのライバル』ではリサの祖先だということになっているバーサ・メイソンの物語である。

『ジェイン・エアのライバル』の「現在の物語」の部分の主人公のリサは、ケンブリッジ大学の大学院で社会学と心理学の研究をしているアメリカ人である。人間関係、特に恋愛における男女間の関係に関心があり、それを自身の研究テーマにしている。偶数の章でバーサの恋愛の物語が展開していくのと並行して、奇数の章ではリサが男女間の恋愛における様々な問題について自分なりに心理学的に考えてみるのであるが、その時リサは自分自身の体験を振り返るとともに、自分の曾曾曾祖母であるバーサ・メイソンのした恋愛に思いを馳せながら、男女間の恋愛における心理や様々なパターンについて考えを巡らせていく。

バーサの子孫としてリサはバーサと同様にクレオールであり、「白人」とも「黒人」とも言えない複雑なアイデンティティのために社会にぴったりはまりきれないということがどういうものかがわかっている。しかし、このリサがクレオールであるという設定は実はこの物語ではそれほど重要な要素ではない。『ジェイン・エアのライバル』では、『サルガッソーの広い海』におけるほど深く人種的・民族的なアイデンティティの問題が掘り下げて追求されているわけではない。むしろ重要なのはリサが「理想のパートナー」を探し求めている 33 歳の未婚の女性であるということである。ケンブリッジではいつも人に囲まれ、パーティーも頻繁にあるが、それなのにリサは孤独であった。それは彼女にはパートナーがいなかったからなのである。男女の関係には 6 つの段階があるとリサは分析するが、まだパートナーをみつけない自分と同様に、結婚後すぐに結婚相手の男性にもはや愛されなくなり、第一の段階である蜜月期間が短期間で終わった後、三階の部屋に閉じこめられてしまったバーサも、同じ第一段階を超えたことのない女性であったことからバーサに共感し、しかし自らの大胆な行動によってやがてその状況から脱して自己実現を果たすバーサの物語を一通り思い起こしてみながら、最後にはリサは自分も近い将来理

想のパートナーに出会えそうな予感がする。クレア・ホランドは『ジェイン・エアのライバル』のエピローグで「人間関係のダイナミックスについて学ぶ手助けをし、あなたが今いる場所までのあなたの旅において、過去の関係があなたに与えたかもしれない傷をいくらか癒す手伝いのために」(139)この本を書いたと書いているが、バーサの物語を語りながら、語り手であり奇数章の主人公であるリサの心は次第に癒されていき、リサは自分の理想の未来が自分に近づいてきた気がするのである。

『ジェイン・エアのライバル』では、リサとバーサについての物語が語り始められる前に、「Caitlin への手紙—母から娘へ—」と題した著者の手紙文が掲載されている。その「母から娘への手紙」の中でクレア・ホランドは、「あなたが男女間の関係について学ぶ手助けとなるようにこの本を書いた」(viii)と書いている。また一通り物語を語り終えた後には、読者に向けて、まだ「ソウル・メイト」を見つけていない人、男女関係の中に侵されることのない「神聖な場所」を見つけていない人への希望のメッセージとしてこの本を書いた(139)と述べていて、心理学の専門家としての立場から、それを読んだ人々が「理想のパートナー」を見つける手助けになることを意図としてこの本が書かれたことは明らかである。

(5) 自己実現を果たすバーサ

『サルガッソーの広い海』で描かれている物語は、そのほとんどがバーサがイギリスに来るまでの物語であり、それはいわば『ジェイン・エア』の前編である。それに対して『ジェイン・エアのライバル』の場合は、バーサが結婚する前の話から始まるものの、結婚後の話により多くが割かれている。『サルガッソーの広い海』では、一部ロチェスターによる箇所もあるが、その大部分はバーサが語り手となり、シャーロット・ブロンテが『ジェイン・エア』に書かなかった部分がバーサ・メイソンの視点から語られる。それに対して『ジェイン・エアのライバル』は、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』ではバーサはその狂気のためにソーンフィールド・ホールに閉じ込められ、その後自ら館に火を放った際に屋根から落ちて死んだと信じられているが、実はそうではなかったとして、ジェインの知らない「真実の物語」を明らかにする。

『ジェイン・エアのライバル』の登場人物のひとりで、ソーンフィールド・ホールで御者として働く前述の John は、この物語で独自に創造された人物である。『ジェイン・エア』にも確かにジョンという名の召使が登場し、馬車を運転したりする役割を担っているが、『ジェイン・エアのライバル』のジョンは背が高く、肩幅が広くて浅黒く、ハンサムな 30 代前半の独身男性であり、『ジェイン・エア』のジョンは年配の男性で Mary という

妻がいることになっている。『ジェイン・エアのライバル』のジョンは、もともとその父親が故ロチェスター氏、すなわちエドワード・ロチェスターの父親の御者をしていたため、子どもの頃からソーンフィールドで暮らしていて、12歳から馬小屋で働きはじめ、その後飼育係になり、21歳のときに年老いた父親に代わって御者になったということになっている。父親の名前については特に言及がないので、この『ジェイン・エアのライバル』の30代のジョンは、『ジェイン・エア』に登場するジョンとメアリーの息子ということなのかもしれないが、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』にはそのような人物は登場しない。

もはや夫に愛されることもなく、三階の部屋に監禁されていたバーサは、窓からある男性が少年から男性に成長していく姿を10年近くにわたって見ている。その間ずっと人に触れられたい、キスされ、抱かれ、再び自分が女性であることを感じたい、生きている間にたったひとつのキスでも交わしたいと思っている。そして、願わくはいつも窓から眺めていたその男性の男らしい腕に抱きしめられたいと感じている。ついにこっそり馬小屋まで行く機会を得たバーサは、その容姿の美しさでジョンを魅了し、ふたりはたちまち恋に落ち、可能な限り密会を重ねるようになる。

ジョンとの出会いによって、バーサは自分という存在が変わっていくのがわかり、自分には未来があると思え、人生に新しい意味が見出せるようになる。ジョンは彼女の苦しみを取り去り、恐怖を取り除いてくれる。バーサはロチェスターが自分から奪ったもの、自由や彼女の人生をジョンが返してくれていると感じる。

やがてバーサはロチェスターから自由になって自己実現を完全に果たすため、ある計画を実行に移す。グレース・プールが酔っぱらって寝ている間に彼女の体を茶色に塗り、髪の色も変え、自分の寝巻を着せた上で、バーサはソーンフィールド・ホールに火をつける。火事の後に発見されたグレースの死体をバーサのものだと人々に思いこませることに成功すると、はじめは他の人たちに気づかれないようにひっそりとジョンの妻として暮らすが、やがてジョンと一緒にイギリスを離れ、西インド諸島で幸せに暮らす。

『ジェイン・エア』において、バーサはその Englishness を強調することで、ジェインの美德や道徳性を強調するための対照的なイメージとして、19世紀のステレオタイプ的な植民地出身の女性として登場し、¹⁰ Sandra M. Gilbert と Susan Gubar の見解では主人公ジェインがしたいと思ったことをジェインの代わりにするジェインの「分身」としての役割だけを果たしている。¹¹ そんな中でジーン・リースの『サルガッソーの広い海』が『ジェイン・エア』では完全に脇役で、声も与えられていなかったバーサに声を与えたのに対し、クレア・ホルランドの『ジェイン・エアのライバル』は、バーサに互いに愛し合うことのできる新しいパートナーを与え、自己実現できなかった彼女に自己実現の機会を与えて

いる。この物語の中ではバーサ・メイソンが不当に狂女として扱われ、監禁されていたことが明らかにされるだけでなく、バーサはジョンと情熱的な恋愛をし、彼によって過去の傷を癒され、希望ある未来、生きる価値のある人生を手に入れるのである。

(6) ^{パッション}情熱のない人生なんて

クレア・ホランドは「^{パッション}情熱のない人生は生きる価値がない」とエピソードで語り、彼女にとっての理想の恋愛は「^{パッション}情熱」によって結ばれる恋愛である。ホランドは「自分が熱烈になるものを見つけ、自分を含めてそれが誰も傷つけないのであれば、いつでもどこでもできるだけそれにふけりなさい」(139)と読者に語りかける。

『ジェイン・エアのライバル』の奇数章の主人公のリサは、真の^{パッション}情熱によって深く結び付いた愛をまだ経験したことがない。彼女の祖先であるバーサも『ジェイン・エア』の中ではそうであったが、『ジェイン・エアのライバル』では、ロチェスターとはそのような関係にはなれなかったものの、その後ジョンと出会って、お互いが深く結びつきあった理想の恋愛を成就させる。

バーサはジョンに会い、ジョンに触れているととても満たされた気分になる。バーサとジョンがキスし、抱擁すると互いの二つの魂がからみあい、ジョンはバーサといるとより自分が男だと感じ、バーサは自分が女だと感じる。バーサはジョンといるとこの世の中にやっと自分の居場所を見つけた気がする。はじめは体の方が心より満たされていたが、しだいに心もよりいっそう満たされていき、ジョンと一緒にいると安心できたし、お互いに同じだけ相手に愛されていると感じられる。

ソーンフィールドの周辺の女性たちに人気があり、あらゆる女性にやさしいジョンは、彼女たちが望むことはなんでもしてあげていた。少年の頃から女性たちにひっぱりだこで、夫との生活に不満のある既婚女性から望まれてベッドをとにもすることもあった。ある日自分が拾ったジョン宛ての手紙から、バーサはジョンが他の女性とも会っていると疑う。ジョンの愛の言葉は嘘であり、彼を信用したのは馬鹿だったとショックを受け、ジョンをののしる。

確かにジョンはこれまでいろんな女性の相手をしてきたが、そこに愛はなかった。彼女たちは女性を性的に満足させる方法を教えてくれたが、愛する方法は教えてくれなかった。しかしジョンはバーサと自分の関係は今までの他の女性とのそれとは違うと思いはじめている。肉体的欲求と感情が出会う場所として、単なる「肉欲」ではない「愛」とのコンビネーションによる真の「^{パッション}情熱」をバーサとの恋愛で初めて体験する。もはや彼女なしではジョンの人生に意味がなくなる。喜んでバーサを助け、監禁されている部屋から彼

女を解放する手助けをしたい、そしてバーサには愛の情熱パッションのない生活から自分を救ってもらおうと思うようになる。

一方ジョンに失望し、夢と希望が粉々になったバーサは、自ら進んで三階の部屋に完全に閉じこもってしまう。しかしバーサもジョンもお互いからしばらく離れてみると、次第に怒りやプライドよりも愛する人を失った喪失感がどんどん大きくなり、離れていることはもはや不可能になる。やがて危険をおかしてジョンはバーサの部屋まで行き、ジョンもバーサもその場ですぐにお互いを許し、二人の結び付きはより深くなる。

一見、ロマンチックなラブ・ストーリーのようであるが、バーサのしている行為は不倫に他ならない。夫にはもはや愛されず、狂人扱いされて三階の部屋に閉じ込められ、自由を奪われ、その存在自体を隠されて孤独な生活を送るとともに、夫であるロチェスターはガヴァネスのジェインと恋愛をしている。しかしそれでも夫がある身でありながら、他の男性と自ら進んで性的関係を持つというバーサの行動は 19 世紀の父権制社会の道德規範からすれば、かなり不道德な行為と言える。最終的にジョンとバーサ以外の人々はみんなバーサは死んだと思いこんでいたので、ロチェスターがバーサと離婚をしたり重婚の罪を犯すこともなく、またジェインが愛人の身分に甘んじることもなく、ロチェスターとジェインは念願かなって正式に結婚することができるようになる。一方で、バーサはジョンと密かに夫婦になる。最終的にバーサはジョンの妻になれたからよかったものの、結婚していない相手と性的関係を持った後、最終的にその人と夫婦となるには至らずに終わったとなれば、バーサの行為はそれが明るみに出ると当時の道德規範では精神異常者¹²や売春婦扱い¹³をされてしまう行為である。

ひと通りバーサの物語を語った後、最終章でリサは自分がバーサの立場であったらどうしただろうと考える。三階の部屋に閉じ込められていたバーサは、見張り役のグレース・プールが酒を飲んで眠ってしまっている時に部屋を抜け出せることがあった。だからといって当時の社会状況を考えればソーンフィールドから逃げ出すのは容易ではない。ロチェスターの屋敷の外に出ることはできても、当時の女性が職業を得るのは容易ではなかったから、むやみに逃げ出しても飢え死にしたかもしれない。また途中で見つければ捕まえられて刑務所か精神病院に入れられてしまうかもしれない。

リサはオックスフォードと迷った末に、ケンブリッジで学ぶことを決めたのだが、ケンブリッジで学ぶことでゆっくりとではあるが変化していくケンブリッジの生きた歴史の一部に自分になれることに喜びを感じている。ケンブリッジ大学の学寮のうち Magdalene College が女子学生の受け入れを最後にはじめた学寮なのであるが、このモードリン・コレッジが女子学生を受け入れるようになったのはそれが創設されてから 400 年以上も後で、オックスフォードで最後に女子学生を受け入ようになった Oriel College がそれを

始めたのよりもさらに3年遅れてのことである。しかもそれは1988年の出来事で、ほんのつい最近のことであると知り、そのことにリサは驚く。そんなリサは19世紀の父権制社会の中にあっても「情熱」のある人生をあきらめなかったバーサの行動の大胆さに、勇気をもらうのである。

(7) おわりに

冒頭の章でリサは、自分が祖母から聞いたバーサ・メイソンの物語は「禁じられた愛と復讐」、「残忍な殺人」の物語であり、また「ラブ・ストーリー」でもあったと語っているが(5)、バーサの「^{パッション}真実の物語」を最後まで読み終えた読者に『ジェイン・エアのライバル』が与える全体的な印象は後者である。監禁されている妻がその部屋をこっそり抜け出して恋人と情熱的な一夜をたびたび過ごし、やがてバーサに見せかけてグレース・プールを殺し、密かに結婚するというドラマチックな物語が偶数章で展開されていくが、奇数章で展開される男女の恋愛の一般的なパターンについてのリサによる心理学的考察にあてはめると、ジョンとバーサの恋愛も一般的な恋愛のパターンのひとつにあてはまり、根本的には彼らの恋愛も何ら特別なものではなく私たちの誰もが体験し得るごくありふれた恋愛と基本原理は同じであることがわかる。ふたりのドラマチックなラブ・ストーリーを通して自分の過去の恋愛を振り返ったり、自分が今している恋愛を見つめ直したり、これから体験し得る恋愛について読者は考える機会をもらうのである。

クレア・ホランドはプロローグの中で『ジェイン・エア』をティーンエイジャーの時に読んで、それは自分のお気に入りの本になったと語っている。『ジェイン・エア』では、主要登場人物であるジェインとロチェスター自身が、前者はセント・ジョン、後者はバーサ・メイソンや Céline Varence、Blanche Ingram らと結婚したり、結婚しそうになりながら、最終的に身分の違いも越えて心から情熱的に愛することができるパートナーとしてお互いを認識し、最後にはバーサ・メイソンが亡くなったことで障害もなくなって結婚をする。この有名なジェインとロチェスターのラブ・ストーリーを題材にして、それと並行して隣り合う章で男女関係について心理学的な分析をし、二人の男女関係を心理学的立場から解説・検証することもできたはずである。しかし、それをする代わりにホランドは、バーサとジョンの恋愛という『ジェイン・エア』にはなかった新しい要素を導入し、ジョンとバーサ以外には誰も知らないバーサの「真実の物語」を語るという形の物語を作っている。それによって一方では心理学の本でありながら、一方ではやはり小説としても十分に機能を果たした作品を完成させている。全体的には心理学の本の要素が強いように思えるが、『ジェイン・エア』で語られた物語に新たな解釈を加えた娯楽小説としても

十分に楽しめる物語になっているのである。

註

1. この物語は最初 *Adèle* というタイトルで出版されたが、その後新たな版で出版された際には *Thornfield Hall* と改題され、更に別の出版社から出版された一番最近の版では、内容についても最後の部分に大きな修正を加えたうえで *The French Dancers Bastard* と改題された：Emma Tennant, *Alèle: Jane Eyre's Hidden Story* (William Morrow-HarperCollins, 2002. New York: Perennial-Harper-Collins Publishers, 2003); *Thornfield Hall: Jane Eyre's Hidden Story* (New York: HarperCollins Publishers, 2007); *The French Dancers Bastard: The Story of Adèle from Jane Eyre* (London: The Maia Press, 2006).
2. Susannah Clapp, 'The Greatest Swinger in Town', *The Guardian*, 29 January 2006 <<http://www.guardian.co.uk/stage/2006/jan/29/theatre.angelacarter>> [accessed 20 September 2011].
3. Claire Moise, *Alele* [sic][.] *Grace and Celine: The Other Women in Jane Eyre* (College Station, TX: Virtualbookworm.com., 2009); Teana Rowland, *I am Jane Eyre: The Untold Story* (Lexington, KY: Neepradaka Press, 2010); Tara Bradley, *Jane Eyre's Husband: The Life of Edward Rochester* (Lexington, KY: [CreateSpace], 2011); J. L. Niemann, *Rochester: A Novel Inspired by Charlotte Brontë's Jane Eyre* (Victoria, Canada: Trafford Publishing, 2009); Hilary Bailey, *Mrs Rochester: A Sequel to Jane Eyre* (New York: Pocket Books, 1997); Kimberly A. Bennett, *Jane Rochester: A Novel Inspired by Charlotte Brontë's Jane Eyre* (New York: Writers Showcase Press, 2000); Elizabeth Newark, *Jane Eyre's Daughter* (Naperville, Illinois: Sourcebooks Casablanca-Sourcebooks, 2008).
4. バーサ・メイソンは、『ジェイン・エア』では主に「バーサ」と呼ばれるが、本稿の本文中でも言及する通り、『サルガッソーの広い海』ではミドル・ネームで「アントワネット」と呼ばれることが多いし、『ジェイン・エアのライバル』では大半は「ルーエラ」という呼び名が使われている。本稿で主に論じる『サルガッソーの広い海』と『ジェイン・エアのライバル』では「バーサ」という名前はほとんど使われないのであるが、バーサのミドル・ネームは母親の名前に由来するものなので、バーサとその母親のそちらを指しているかを明白にするとともに、それらがすべて三つの作

品のそれぞれで描かれている同一の人物を指していることを明白にするための総称として本論では「バーサ」という名を用いる。姓については、ロチェスターと結婚後はバーサの姓はロチェスターに変わっているはずであるが、『サルガッソーの広い海』では物語の約三分の一がバーサの結婚前の物語であることから、総称として結婚後のバーサに言及する際も便宜上「バーサ・メイソン」という呼称を使用する。

5. Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, ed. by Margaret Smith (Oxford: World's Classics-Oxford University Press, 1998), p. 473.
6. Clair Holland, *Jane Eyre's Rival: The Real Mrs Rochester* (Cambridge: Blue Ocean Publishing, 2011), p. 5. 以下『ジェイン・エアのライバルー真実のロチェスター夫人』からの引用にはすべてこのテキストを用い、本文中の括弧内にページ番号を記す。
7. Jean Rhys, *Wide Sargasso Sea* (1966. New York & London: Norton, 1999), pp. 13, 14, et al.
8. ジェインが Mrs Reed の家を出て Lowood School に行ったのが 10 歳であり、そこで最初は生徒として、その後教師として 8 年暮らした後、ソーンフィールド・ホールでガヴァネスとして働き始める。やがてロチェスターに求婚されるが、彼には実は妻があるとわかってそこを去り、セント・ジョンとその妹たちと過ごしている時の年齢がほぼ 19 歳ということになっている。その時セント・ジョンから新しく出版された Walter Scott の *Marmion* をもらうのであるが、それが出版されたのは 1808 年である。よってジェインが生まれたのが 1789 年であり、またジェインは自分の伝記をロチェスターのもとに戻って彼と結婚した 10 年後に語っていることになっているので、自伝を語っているのは 1819 年頃でジェインが 30 歳の頃ではないかと考えられる。
9. Jean Rhys, *op. cit.*, p. 88.
10. これについて詳しくは拙著, 「*Jane Eyre* における異国的なイメージの使用について」, 『千里山文学論集』70 号 (2005), pp. 19-44 を参照。
11. Sandra Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-century Literary Imagination*, 2nd ed. (1979. New Haven and London: Yale University Press, 2000), p. 359.
12. 19 世紀のイギリスにおいては女性の狂気は女性のセクシュアリティと関係があると考えられた。また社会規範を逸脱した行為が狂気とみなされた (Elaine Showalter, *The Female Malady: Women, Madness and English Culture, 1830-1980* [New York: Pantheon Books, 1985; London: Virago Press, 1987], pp. 7, 29.)。
13. 荻野美穂「堕ちた女たち——虚構と実像」, 『民衆の文化誌』松村昌家他編 (研究社, 1996 年), pp. 164-176.